

平成 29 年産米の作柄・品質と次年度対策

ここがポイント！！

- 1 平成 29 年産米の作柄はやや不良だが、品質は良好！
- 2 平成 30 年産米は品質と収量を兼ね備えた適度な籾数の確保を！

1 平成 29 年産米の作柄と品質

(1) 新潟県全体 (北陸農政局 12 月 5 日及び 25 日公表)

- 新潟県の作況指数は 96 と、平年に比べ「やや不良」となりました。
 地域別では、岩船 102、下越北 98、下越南 95、中越 91、魚沼 97、上越 99、佐渡 95 となりました。
- 県全体の 1 等級比率はこしいぶきが 85%、コシヒカリは 84%となりました。
 こしいぶきは昨年産より 2 ポイント程下がりましたが、コシヒカリについては 1 ポイント程高くなりました。試験栽培から一般栽培となった新之助は 93%でした。

(2) 新潟地域管内 (11 月末日現在 普及指導センターとりまとめ)

- 推定収量は早生 545kg/10a で「やや不良」、中生 510kg/10a で「やや不良」と、収量がやや少なくなりました。
- コシヒカリの 1 等級比率は 89%でほぼ目標値並みの高品質となりました。五泉市と JA 新潟市管内で品質がやや低く、主な格落ち要因は除青未熟粒、心白粒、青未熟粒でした。
- こしいぶきの 1 等級比率は 90%で目標値並みの高品質となりました。主な格落ち要因は青未熟粒、除青未熟粒、カメムシによる斑点米でした。
- 新之助の 1 等級比率は 90%で、除青未熟粒、胴割粒が主な格落ち要因でした。
- うるち全体の 1 等級比率は 88%となりました。

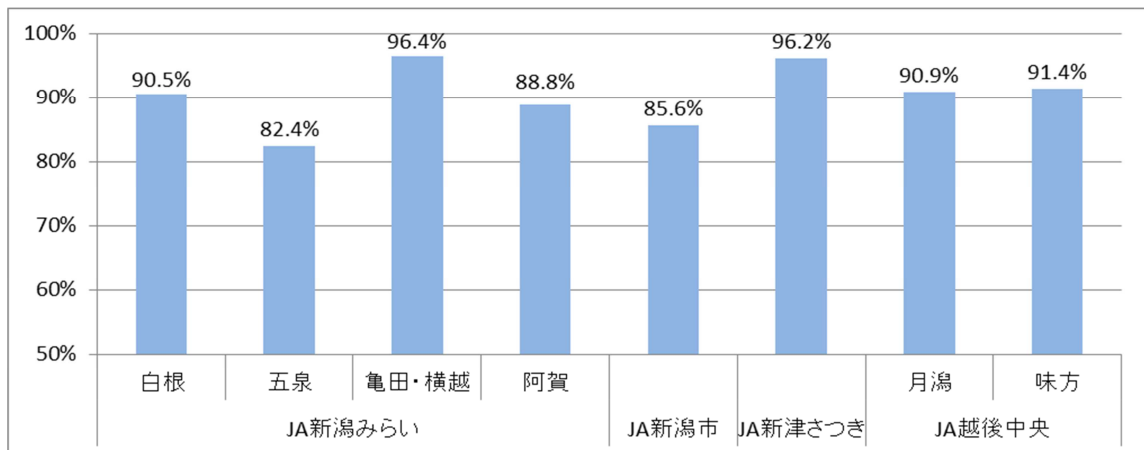


図-1 コシヒカリ(主食用)の地域別 1 等級比率

2 収量・品質に影響を及ぼした要因と課題

(1) 収量に及ぼした要因

○マイナス要因

- ・穂数が「やや少～並」であった。(6月上中旬の低温や7月初旬の日照不足で有効茎の発生抑制)
- ・一穂粒数が「やや少」であった。(7月上旬の高夜温で草丈が急伸長、幼穂形成期の茎質不良)

(2) 品質に及ぼした要因

○プラス要因

- ・総粒数が「やや少」であった。
- ・後期栄養が確保できた。(適正な穂肥が施用された)
- ・登熟期間の飽水状態を維持できた。(適度な降雨があった)
- ・台風被害が少なく、倒伏も少なかった。

○マイナス要因

- ・登熟初中期の少照と登熟期間の低温で、登熟が不揃いであった。
- ・一部でカメムシ防除が不徹底だった。

(3) 課題

- ①【収量の確保】→ 初期の分けつを確保し、穂揃いを良くする！
- ②【品質の維持】→ 適正な粒数を確保し、登熟を良くする！

3 次年度対策～重点技術対策の実践～

- ・次の重点技術対策を実践し、適正な収量と高品質を確保しましょう。

		重点技術対策
米づくり	稲づくり	1 適正な生育量の確保 ①適期田植え (好天日に田植え) ②早期に目標茎数を確保 (健苗育成、移植前追肥の施用、適正な栽植密度) ③過剰粒数の是正 (適期中干し・溝切りの実施)
		2 後期栄養の確保 ①土づくりの実践 (土壌改良資材等の施用) ②作土深 15cm を確保 ③土壌条件に合った基肥量 (基肥一発肥料の施用量の適正化) ④生育診断に基づく適切な穂肥施用 (出穂前後の適正な葉色維持、高温年の出穂前追肥の実施)
		3 適正な水管理の実施 ①出穂前後は飽水管理を徹底 (可能な限り完全落水日を延長) ②フェーン予測時の湛水対応
		4 適期収穫および適正な乾燥調製の実践 ①適期収穫の実施 (適正な作付け比率・栽培体系の実施、立毛中の急激な乾燥遭遇時の刈り遅れ防止) ②適正な乾燥調製の実施 (乾燥温度・速度の調整による胴割米の発生防止、適正な調製による未熟粒・被害粒の除去と粒混入の防止)